

宰府画報

第2号

2020年9月
(令和2年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課

調査見聞

絵師調査チームのご紹介

前号では太宰府市がおこなっている調査事業の概要についてお話ししました。今号では絵師の資料調査をおこなう「絵師調査チーム」と、調査の内容についてご紹介します。

どんな人が調査をおこなっているの？

太宰府の絵師三家（齋藤家・吉嗣家・萱島家）に伝わる資料は絵画作品だけでなく、画稿（絵の下書きなど）や文書類、画材その他の工芸品など多岐にわたります。これらの資料を正確に調査・分析するために、また、資料を破損することの



資料を復元して計測や撮影をおこなう（齋藤家資料）

ないように、日本美術史を専門分野とし、資料の取り扱いに習熟した調査員が必要となります。そこで大学教授や学芸員といった専門家、本調査事業が始まる以前より資料調査に関わってきた太宰府市文化ふれあい館の学芸員、文字資料を中心に調査を担当する太宰府市公文書館職員による「絵師調査チーム」を結成し、調査をおこなっています。調査員は現在九名で、文化財課職員一名が事務と報告書のとりまとめを担当しています。

調査って何をやるの？

平成三〇年度に報告書を刊行した齋藤家資料の場合、事業を開始した平成二六年度より四年の歳月をかけて千件以上の調査をおこないました。調査は資料を一点ずつ記録することから始まります。計測・材質や資料の状態・文字の解読など、調査項目は様々です。絵画資料の場合は名称の特定、つまり何が主題かを判断することも重要です。記録が済んだら全体図と部分図の写真を撮影します。そうやって集められた記録データと写真はパソコンに入力して整理され、さらに詳細な分析が進められます。とても地味な作業ですが、時には現存作品の下書きが発見されて制作過程を知ることができたり、模写やスケッチなどから絵師の



調査成果の公開（齋藤秋圃展／2018年）

学習姿勢などを窺うこともできます。また、手紙などの文書類からは、絵師の交友関係や、今まで不明だった絵師の経歴が分かる場合もあります。こうした地道な調査によって、いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのようにしたのかという歴史の5W1Hが少しずつ明らかになっていくのです。

どこで調査しているの？

調査は通常は文化ふれあい館内の調査室でおこなわれていますが、必要があれば市外や県外の作品も見に行きます。齋藤秋圃は北部九州に多く作品がのこされていて、福岡市の博物館や寺社、秋圃がお抱え絵師として活躍していた朝倉市秋月や、一時滞在したことが知られる佐賀県有田町にも調査に訪れました。これらの調査により、太宰府の絵師に関する研究は進展し、作者不明の作品が実は齋藤秋圃のものであったというような新たな事実も判明しています。

調査成果は『太宰府の絵師調査報告一 齋藤秋圃・梅圃関係資料』や『太宰府市公文書館紀要―年報太宰府学―』に報告されている他、文化ふれあい館やいきいき情報センターなどでの展覧会やパネル展を通じて公開されています。本誌でも逐次最新情報を発信していく予定です。（木村純也）

メイシヨ メイブツ 坂本八幡宮の注連柱

大宰府政庁跡の北西に位置する坂本八幡宮は、地元の坂本地区の人々によって信仰されてきた神社です。昨年、新元号「令和」発祥の地として一躍注目を浴びた太宰府ですが、この坂本八幡宮は「令和」の典拠となった梅花の宴が開かれた候補地の一つとして多くの参拝者が訪れるようになりました。戦国時代創建と伝わりますが、確かなことは分かっていません。ただし、境内に残る鳥居には文化年間（一八〇四〜一八）の銘があり、江戸時代にはこの地に神社があったようです。

ここにも太宰府の絵師に関連するものがあります。それは坂本八幡宮を正面から入る階段の一番手前にある注連柱（しめ縄を掛ける柱）です。正面右に「英霊千古在 大正十二年三月建立」、左に「香火萬年新」、裏面に「鼓山書」と刻まれており、吉嗣家三代の吉嗣鼓山の字をもとに彫られたことが分かります。鼓山は書画の掛軸や扁額（おもに室内に掲げる横長の額）を中心に多くの作品を残していますが、太宰府近辺に建てられた石碑



の文字もたくさん書いていたようです。市内各所にあるほかの石柱や石碑にも、鼓山の書が刻まれているかもしれません。ぜひ探してみてください。（木村純也）

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

吉嗣梅仙作 【百老図】

百はたくさんの意味

鶴が舞い、松がそびえる山中に、たくさんの人物が密に描かれています。侍者を除いた八二人の人物は、みな白髪で長い髭をたくわえたおじいさんです。美味しそうにお酒を飲んだり談笑したり、優雅に本を読んだり書を書いたりしています。俗世間を離れて穏やかに暮らすことは理想的な生き方のひとつであり、たくさんの長老が描き込まれた本作品には、幸福と長寿がますます増えるようにとの意味が込められています。

吉嗣梅仙

作者の吉嗣梅仙（一八一七〜九六）は幕末から明治半ばにかけて活躍した絵師です。吉嗣家は、もとは太宰府天満宮に奉仕した社家でしたが、絵の道を志し



絹本着色・掛幅装 各 125.0 × 41.7 cm

明治 26 年 (1893) 作
吉嗣家資料 (個人蔵)

めでたい古稀に描いた永遠の理想郷に、梅仙はどのような想いを込めたのでしょうか。
(井形栄子)

た梅仙は、齋藤秋圃に絵の手ほどきを受け、のちに周防国(山口県)の南画家(※1)、小田海僊の作風を慕ったと伝えます。吉嗣家資料の中に「百合」(海僊の別号)の墨書を持つ百老図の模写があり、梅仙がたしかに海僊の図に学んでいたことを示すとともに、本作品がその模写を材料にして作られたことを窺わせます。

人生の集大成

画中の落款(※2)から梅仙七七歳の作とわかり、孫の鼓山による箱書(※3)には、この頃病によって半身麻痺となった梅仙が、渾身の力で描いた絶筆というべき作品であると記されています。吉嗣家を離れることなく伝わった本作品は、おそらく依頼品ではなく梅仙が自身の為に描いたものと思われま



部分図 (左図の左端あたり)

【キーワード】

- ※1 南画 中国の絵画系統のひとつである南宋画に由来。柔軟な画風、中国風のモチーフ、画中に漢詩をともなうことなどが特徴。
- ※2 落款 「ひとことくずし字」コーナー参照。
- ※3 箱書 書画や工芸品を入れた箱に、題名や作者、由緒、所有者や鑑定などを記したもの。

いちまい
賞 鑑 稿 画

齋藤家資料 【菊慈童図】



紙本墨画 / 18.5 × 16.7 cm

七草(人日)、桃(上巳)、端午、七夕とともに、一年の節目とされた五節句のひとつ、重陽。なぜか今では知る人が少なくなってしまう。したが、菊の節句とも言われる九月九日には、菊の花びらを浮かべた酒を飲んだり、菊の花にのせた綿に夜露を染ませて、その綿で身を拭い、長寿を願う風習がありました。

菊慈童は古代中国の王に仕えていた童子です。罪を犯して流され、遠く離れた山中で菊の露を飲むうちに、七百年の長寿を保った、または不老不死の仙人になったといい、菊と長寿を結ぶ故事の一つとなっています。

有り合わせの紙片を継いだ小さな画面には、図の肝である菊慈童の顔と上半身が、細かく丁寧に描かれています。本図のように愁いとともに気品をたたえる菊慈童図は、齋藤秋圃が得意とした画題のひとつで、上出来の完成作品も現存しています。(井形栄子)

ひとこと くずし字

【歳・翁】

書画作品には多くの場合、「落款」という作者のサインが記されます。実名や雅号の他、年齢や制作年、描かれた場所などが記されることもあり、落款があることにより、さまざまな情報を得ることができま



す。今回は、この落款でよく見かける二文字を見ていきます。

太宰府市文化ふれあい館に保管される齋藤家や吉嗣家の作品にも落款を持つものがあり、たとえば左下写真の齋藤秋圃筆《鷹図》や、上記「逸品探訪」で紹介している吉嗣梅仙筆《百老図》の落款には、それぞれ「行年九十一歳土筆翁秋圃」七十七

翁(梅仙)と記されています。さて、中央右写真の「歳」は、上部の「止」がカタカナの「ロ」のように、下部は「半」のように簡略化されています。ぱっと見ると「筆」のようです。一方、左写真の「翁」は、上部の「公」がカタカナの「ク」、下部の「羽」はひらがなの「ね」のように崩されています。「歳」は文字通り年齢を示すもので、「翁」は高齢の男性がへりくだった表現として用いました。この二文字とあわせて、上に書かれる漢数字(年齢)のくずし字読解にも挑戦してみてください。(木村純也)

※行年 これまで生きてきた年数の意。



齋藤秋圃《鷹図》
齋藤家資料

無事に2号ができました。作品紹介は敬老の日にあやかって、重ねていきます。